

# 平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡発掘調査現地説明会資料

2014年8月16日

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

調査地 京都市南区西九条北ノ内町6・7・8

調査面積 1500㎡

調査期間 2014年5月21日～9月30日（予定）

## はじめに

今回の調査地は、平安京左京九条二坊十六町跡及び安土桃山時代の御土居跡に位置します。

本調査地周辺でこれまで行われた発掘調査では、主に平安時代前期の池や土坑・柱穴群、平安時代後期の井戸や土坑・柱穴群、鎌倉時代の井戸・柱穴群などを検出しています。

また、本調査区の約30m南で行われた調査では、幅17.5m以上、深さ2.2mの御土居の堀を検出しています。堀からは、多量の木製品をはじめ土器、瓦類が出土しました。堀と土塁からなる御土居は、外敵の襲来に備えた防塁と川の氾濫から京都の街を守る堤防として、天正19年(1591)に豊臣秀吉により造営されました。京都の街を囲む御土居の総長は約22.5kmにも及び、今回の調査地はその南部の一角にあたります。

## 調査成果

平安時代末期から鎌倉時代 建物やその基礎となる地業、井戸、土坑、柱穴、落ち込みなどを検出しました。地業は、調査地の中央と南端に3つ確認しました(建物1、地業1～2)。建物1の地業は、南北約5.2m×東西約3.5mの範囲で地面を掘り込み、底面に拳大ほどの礫を敷

き、その上に土を突き固めて地盤を改良し、建物の基礎としていました。また地業の四周には柱穴が並んでおり、一連の建物と考えられます。井戸は現在までに6基を確認しています(井戸1～6)。井戸1では一辺約90cmの方形縦板横棧組の井戸枠が、井戸5では直径70cmの木を割り抜いた井戸枠が残存していました。深さはいずれも0.8～1mで、基盤層となる砂礫層から湧水していたようです。井戸2・3・4は南北に並んでいますが、出土遺物から井戸2が鎌倉時代初頭に廃棄された後に、井戸3・4が作られたことがわかりました。土坑1～4は土器溜まりで、土坑1からは鎌倉時代の三足付き羽釜が4～5個体分出土しました。

安土桃山時代から江戸時代 調査区の西側で、御土居の堀を検出しました。堀は南北方向で、東肩のみを確認しました。西肩は調査区外に位置します。幅7m以上、深さは約0.5～0.6mで、南北45m分を検出しました。堀からは、木製品や土器が出土しました。

## まとめ

今回の調査では、平安時代末期から鎌倉時代にかけての建物の地業や井戸、安土桃山時代から江戸時代の御土居の堀を検出しました。

平安時代の平安京左京九条二坊十六町には、その様子を記した文献史料はありませんでした。しかし、今回の調査で平安時代末期から鎌倉時代にかけて邸宅として利用されていたことがわかり、文献史料からは知ることの難しい本調査区周辺の状況を復元する上で新たな知見を得ることができました。

御土居跡は本調査区の西側に築かれており、従来想定されていた位置で実際に堀を検出することができました。

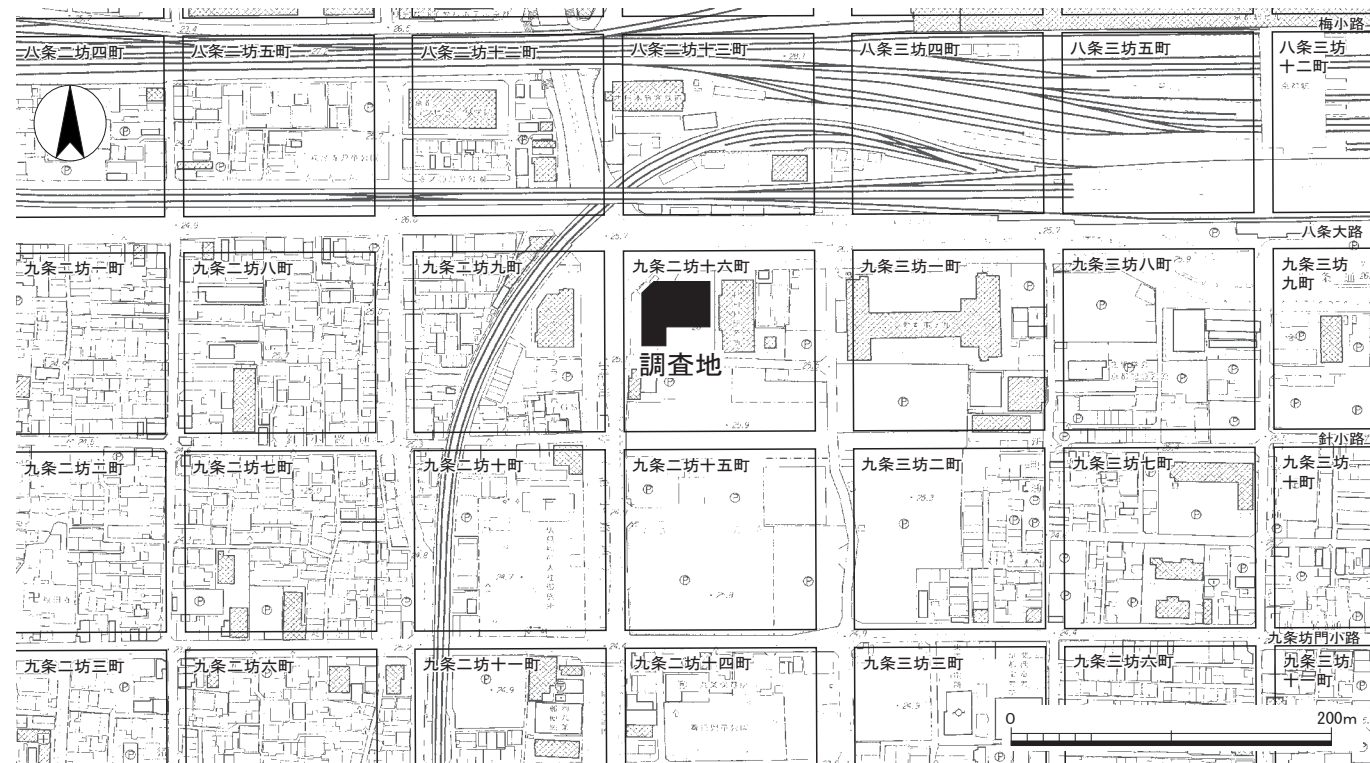


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

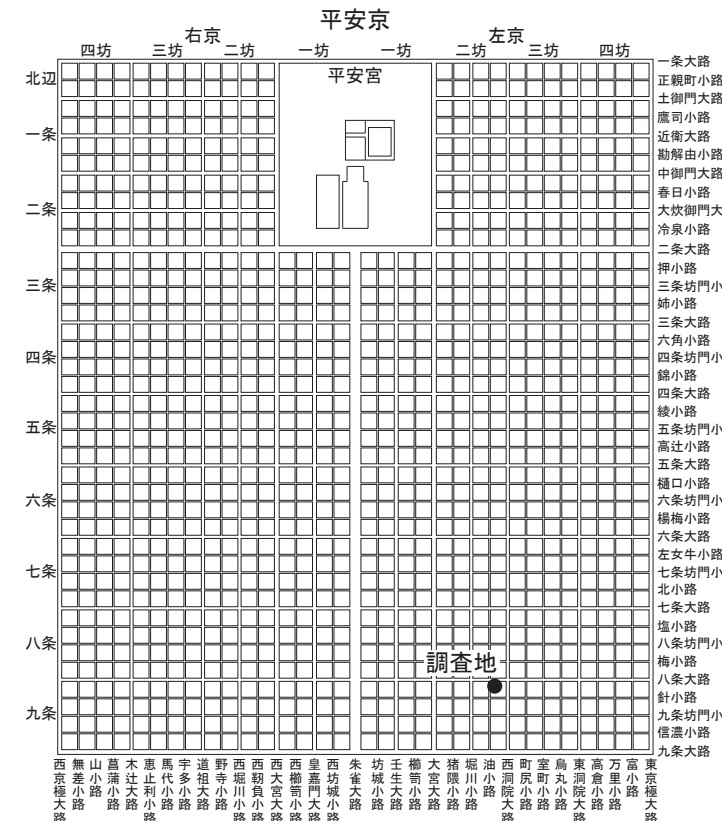


図2 平安京条坊図

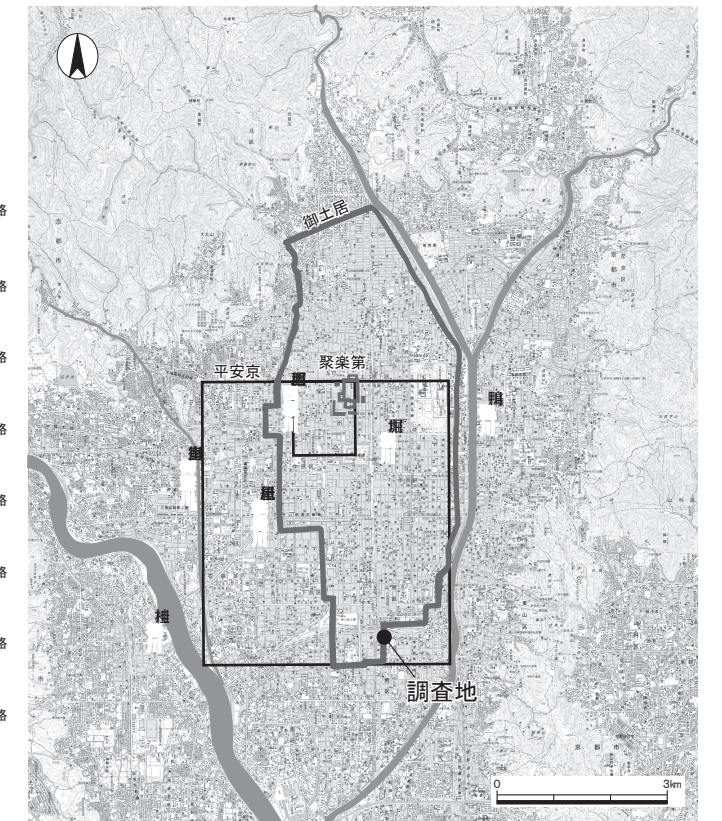


図3 平安京・御土居と調査地点図

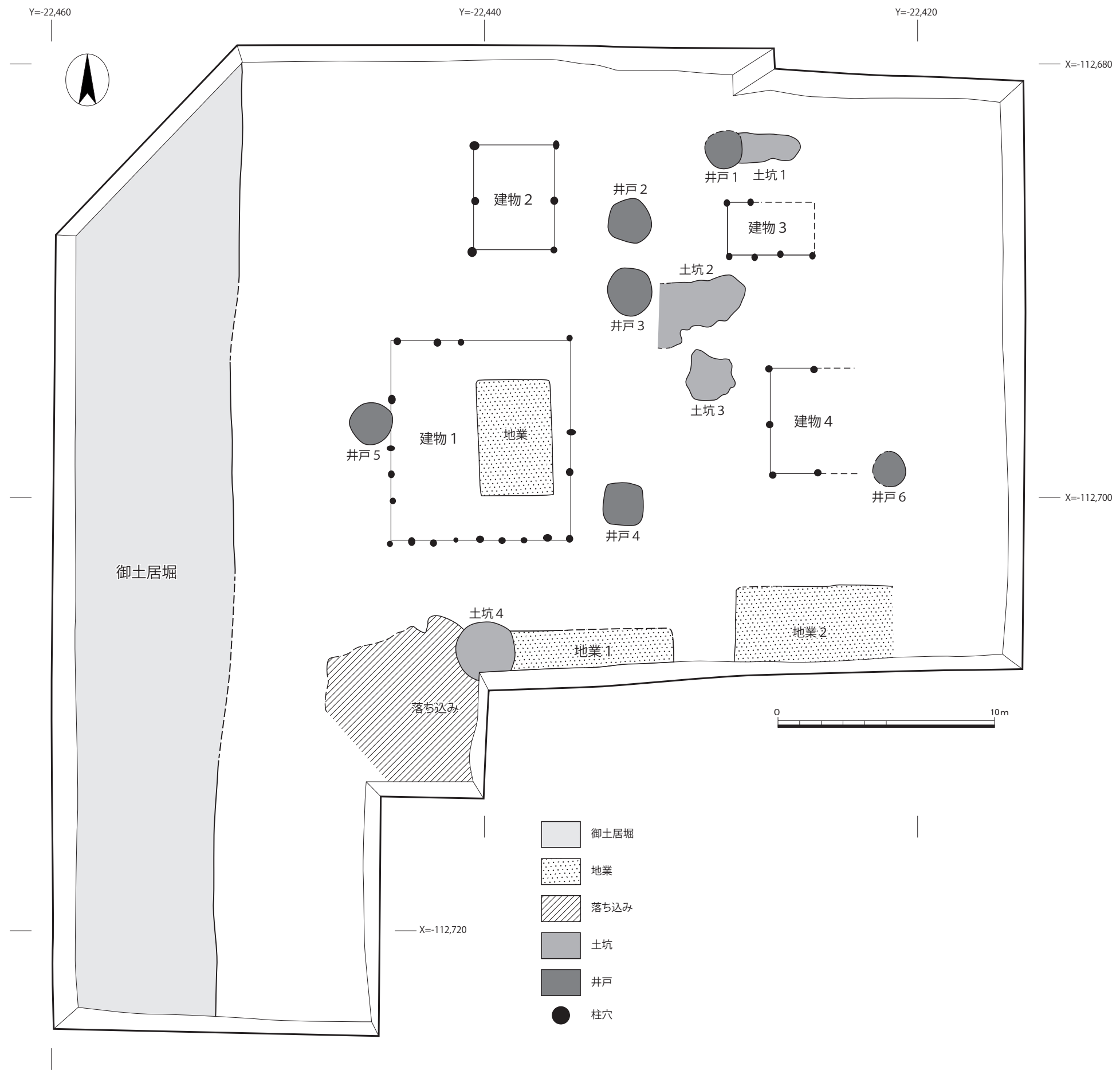


図4 遺構平面図 (1 : 200)